次世代層に対するアパレルデザイン技術啓発活動報告

The report about the enlightening activity of apparel and design technology for next generation layer

~ 2008　Fashion Show of the Future Designers in GIFU ~

野田　隆弘
Takahiro　NODA
宮本教雄　村上眞知子　柳田良造　伊藤陽子　久保村里正　服部宏己
Norio MIYAMOTO　Machiko MURAKLAMI　Ryozo YANAGIDA　Yoko　ITO　Risei　KUBOMURA　Hiroki HATTORI
奥村和則　森島美佳　小川宏樹　仙石佐和子　池田雅広
Kazunori OKUMURA　Mika MORISHIMA　Hiroki OGAWA　Sawako SENGOKU　Masahiro IKEDA

Abstract

The aim of this research was cultivated fashion technology and skill of 17 school students (high school. University, college special school).　For this, Fashion Design Conferences were held four times. To produce fashion products, 10 types of different fabrics were distributed. This year's theme is "The Source ~ ORIGIN". This show gained the supports and sponsor many organizations. 89 works were produced.　The results of the research were demonstrated in the fashion show at Gifu City Culture and Industry Center on 3 August 2008. Posters, flyers, and audio etc. were made mainly by the students. Many citizens, and students watched this fashion show, this show succeeded. After this show, the significance of its fashion show was evaluated in order to validate the results of this project through the questionnaires to 17 educational institution. As a qualitative assessment, the effect of higher education was recognized.

Keywords : fashion show,　fashion technology, next generation layer

１．はじめに

中部地域はものづくり産業の集積地であり、古くから愛知県、岐阜県では繊維産業が発達してきたが、グローバル経済の進展による低価格競争の中で苦戦を強いられている。本研究はこれまで、この地域のアパレル産業の将来を担う学生を対象にデザイン能力の向上の機会とその発表の場をもつことにおいて繊維産業振興に寄与することを目的にデザイン技術啓発運動展開してきた。本年度は愛知県及び岐阜県におけるファッション系の高校、専門学校、短大および大学からこれまでで最多の 17 校の生徒・学生が参加した。本年度は地場の企業から提供されたテキスタイルを使用し、与えられたテーマ（源　～ＯＲＩＧＩＮ）に応じて生地の特性を生かしたデザイン力を発揮し、新しい作品を制作した。その成果の発表の場としてファッションショーを盛大に実施した。これらの活動を通じて高校から大学までの様々な教育機関の生徒・学生が一堂に会して学び合う場を提供することとなり、参加学生にとっては通常の教育では得ることのできない大きな刺激と達成感を得ることができた。以下にその概要を述べる。

２．本年度の特徴

通常のファッション系の教育機関では成果発表として「ファッションショー」を実施の形態をとっている。このファッションショーは一般的にはデザイナーがまず、テーマに沿ってデザインイメージを創造し、このデザインイメージに適合した生地などを何らかの方法で入手し、これらを縫製し、ファッション製品を制作している。昨年までは、本研究では中京地区が繊維工業の盛んな地域であるので、岐阜市立女子短期大学教員が適宜織物を収集し、これらを参加教育機関に配布し、参加校の生徒、学生は配布された生地の特徴・特性を最大に生かすデザインを創造し、そしてファッション製品を制作するという一般的な方法とは逆の方法を導入した。この点も本研究の独自性の１つでもある。本事業はすでに、これまで 2006、2007 年 2 年間継続して実施した。

本年度は過去の反省をふまえ、研究事業に取り組んだ。

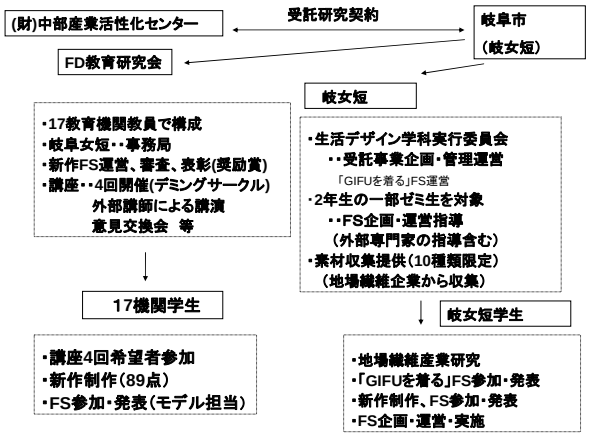

図１　アパレルデザイン技術普及啓発事業概要図

(1)本年度の特色

①アパレルデザイン技術啓蒙普及活動

本年度の活動の体系は図１のようであり、この体系を基盤にして事業を進めた。

②ファッションデザイン教育研究会

2006 年に本事業を実施するにあたり、愛知、岐阜を中心に中京地区のファッション系の高等学校、専門学校、短期大学、4 年生大学に呼びかけたところ、初年度において 16 教育機関の賛同が得られた。このグループをファッションデザイン教育研究会と位置づけ、研究の成果発表としてすべての教育機関が一堂に会してファッションショーを行ってきた。昨年度、2 年間の反省として「教育研究会の教員が集まり、さらにレベルアップを図ることをねらいたい」との要望があった。そこで本年度はこの反省を改善するために４回のファッションデザイン教育研究会を開催することとした。

③生地の配布

前述のように成果発表として「ファッションショー」の形態をとっている。本年度は配布する生地は 10 種類に限定した。参加校はこれらの生地の特性を生かしたデザインを創造することとした。生地が不足の場合には、各自の作品のデザインイメージに適合した生地を自由に選択、使用してもらうこととした。10 種類の生地の主な明細を以下に示す。

表１　使用した生地の明細

試料番号	色　相	布幅 (m)	厚　さ (mm)	混用率（%）		目　付 (g／m^2)	備　　考
1	白	1.40	1.09	綿	88	341	「2」との色違い
				ナイロン	11		
				ポリウレタン	1		
2	黒	1.40	1.19	綿	88	328	「1」との色違い
				ナイロン	11		
				ポリウレタン	1		
3	黒	1.10	0.20	綿	100	110	
4	茶色	1.10	0.02	綿	100	68	
5	白	1.10	0.26	麻	100	126	「6」との色違い
6	ベージュ	1.10	0.27	麻	100	118	「5」との色違い
7	黒	1.10	0.20	綿	100	111	
8	白／黒	1.20	0.29	綿	50	174	
				ポリエステル	50		
9	黒	1.30	0.64と1.51	毛	50	316	生地に凹凸有
				レーヨン	50		
10	茶緑	1.30	0.65と1.41	毛	75	290	生地に凹凸有
				レーヨン	25		

３．成果発表（ファッションショー）のフレーム

2009 年４月から、岐阜市立女子短期大学生活デザイン学科教員各位の尽力により、各分野における交渉、調整などにより、以下のような成果発表のフレームが確定した。

(1)日　程：平成 20 年 8 月 3 日(日)午後 2 時開始
(午前：リハーサル)

(2)会　場：岐阜市文化産業交流センター（じゅうろくプラザ）
岐阜市橋本町 1 丁目 10-11（JR 岐阜駅から徒歩 5 分）

(3)来場予定人数：500 名(生徒、学生、父兄、行政および企業関係者など)

(4)テーマ：「源~ORIGIN~」

(5)参加教育機関：

（　）内の数は出展作品数を示す。全作品数は 89 点である。

（高等学校）　一宮高校(4)、大垣桜高校(5)、岐阜城北高校(3)、済美高校(5)、東濃実業高校(2)　（５校）

（専門学校）　愛知文化服装専門学校(4)、名古屋ファッション専門学校(8)、中部ファッション専門学校(6)、アンファッションカレッジ(2)、飯原服装専門学校(3)、大垣文化総合専門学校(4)、コロムビア・ファッション・カレッジ(4)　（７校）

（大学・短大）金城学院大学(7)、名古屋学芸大学(8)、名古屋女子大学短期大学部(10)、岐阜女子大学(5)、岐阜市立女子短期大学(10)　（５校）

(総計：17 教育機関)

(6)外部指導者

涌井　博之　氏、棚橋　公子　氏

(7)協力　総合美容専門学校ベルフォートアカデミーオブビューティー

(8)共催団体：岐阜市(商工観光部)

(9)後援団体：岐阜県、岐阜県教育委員会、岐阜市教育委員会、社団法人中部経済連合会、財団法人岐阜県教育文化財団、財団法人岐阜県産業経済振興センター、NHK 岐阜放送局、財団法人綿スフ織物検査協会、財団法人日本綿業振興協会、綿スフ織物工業連合会、岐阜県毛織工業協同組合、社団法人岐阜ファッション産業連合会、岐阜メンズファッション工業組合、岐阜婦人子供服工業組合、社団法人日本デザイン文化協会岐阜支部、ナゴヤファッション協会、株式会社六銀行

(17 団体)

(10)協賛企業：柏屋商事株式会社、株式会社カネオ、株式会社ガゼール、株式会社北川商店、株式会社ビゼン、株式会社ルモンド・たかはし、サンラリーグループ、 地球の糸、ヒロタ株式会社、久株式会社、有限会社カナーレ、 ラブリークィーン株式会社　（12 企業　アイウエオ順）

ショー発表に前後して実施したファッションデザイン教育研

究会は次の通りである。

① 第１回ファッションデザイン教育研究会（平成 20 年 5 月 18 日 13 時～　）岐阜市立女子短期大学大講義室

市原光好氏により「地域産業の中で役立つデザイン技術について」ご講演をいただいた。

② 第２回ファッションデザイン教育研究会（平成 20 年 7 月 22 日　9 時～　）

涌井博之氏により「ファッションショーの効果的演出」についてご指導いただいた。岐阜市立女子短期大学演習室

③ 第３回ファッションデザイン教育研究会（平成 20 年 8 月 3 日 10 時 30 分～　）

成果発表の実施にあたり、制作者の努力と作品の優秀性を評価・顕彰するために「奨励賞」を設けた。発表会当日におけるリハーサル直前の審査方法を中心とした代表者会議を開催した。奨励賞は 22 件であった。

④ 第４回ファッションデザイン教育研究会（平成 20 年 8 月 19 日 13 時 30 分～　）

棚橋公子氏「ファッションショーを指導して」の演題で岐阜県毛織工業協同組合毛織会館においてご指導いただいた。

4 月からの研究成果の発表として 8 月 3 日（日）午後 2 時から岐阜市の岐阜市文化産業交流センター（じゅうろくプラザ）にてファッションショーを行った。当日の開催については岐阜市広報広聴課、岐阜市記者クラブなどに資料、ちらしなどを配布し、「広報ぎふ」には 7 月 15 号に掲載された。開催時刻前に、もう会場は来場者でいっぱいとなり、立ち見の人も出るほどであった。来場者は①各教育機関で本日発表する生徒・学生の友人、父兄　②各教育機関担当者と関係の深い知人、友人　③後援団体、協賛企業の関係者そして一般市民であった。会場となる多目的ホールの前の「ホワイエ」に出展する作品のデザイン画、10 種類の生地および岐阜市立女子短期大学生活デザイン学科感性デザイン専修建築・インテリアデザインコースの学生の制作によるオブジェを展示した。ファッションショーの模様は翌日の日刊新聞に報道された。

図２　全作品のデザイン画の展示

(1)正面　　(2)背　面

図３　成果発表の作品の一例

図４　成果発表のフィナーレ

図５　奨励賞授賞式

図６　奨励賞受賞対象作品（一部）

4　研究成果の検証

ファッションショーが終了して、ほどなく、参加した各教育機関の担当教員にアンケートを行い、本事業の成果を検証することにした。以下に主な設問とその主な回答を示す。

(1) 設問：地場のテキスタイル提供、募集テーマによる作品制作およびファッションショーの教育効果、成果と思われることは何でしょうか

《主な回答》

①高校生にとっては短大、専門学校の学生の作品を見学できるよい機会であった。

短時間ではあったが、プロの先生によるウォーキング、ポージン

グの指導がたいへん参考となった。

②大学、短大、専門学校、高校のファッションを学ぶ生徒が一堂に集まり、同じ舞台に立てることが高校生にとって、意欲的に取り組める要因だと感じました。

③ファッション専門学校、被服関連の大学の学生さんにとっては、日頃の成果を発表できるいい機会だと思います。作品もすばらしいものがあります。本学のような被服に関する専攻でない学校ではデザイン、技術とも劣りますが、参加できるだけで収穫があります。授業終了後の時間を利用し、作業を続け、1つの作品を完成させる努力と達成感、他の学生とのはげまし合いなど人間的によい経験をすることができます。

④第三者に自分の作品を評価してもらうことによって自己啓発し、更に創作意欲を掻き立てる効果が期待できる。

⑤授業では学生がデザインをし、生地を選択することが多いのですが、今回のように限られた生地と用尺を用いてデザイン・制作することに新鮮さを感じ、よい経験が出来たと思います。

⑥中部地区の他校の方と共にショーが出来て、作品の作り方やデザインなど参考になったり、刺激となって良かったです。他のコンテストとは違い、参加したい学生が参加できるので、他のコンテストでは体験できない人も参加できて良かったです。研修などもあり、勉強になりました。

⑦他の学校のデザイン画、デザイン、衣装など目の前でみることができるのは生徒にとって何よりの刺激です。

(2) 設問:今回の課題・改善すべきと思われることは何でしょうか

《主な回答》

①他校の学生同士の技術交流ができるとよい。

②布地が豊富とはいかなくてももう少しあれば、より創造力を発揮できると思います。

(3) 設問:各学校・大学の教育効果と相違する当事業の有意義性について

①個人のデザイン性、応用力を育てることが出来る。

②参加審査費用が不要なので意欲のある学生が参加しやすい。
岐阜、愛知を中心とした近隣の大学、高校等との交流ができる。

③岐阜アパレル企業との産学協同の取組みであること。
学生にとっては地場のテキスタイルを作品制作により知ることが出来ること。

④学内の関係者のみならず、学外の関係者に評価されるファッションショーであるところに学校内とは異なった意義があるように感じた。

⑤他校の方との交流や企業の方からの生地の提供があり、学生の見聞を拡げることが出来て、有意義でした。

⑥縫製の仕方、デザイン発想など実際ショーに出ていない子に対しても参加した生徒が持ち帰る思いがデザインとして表現され、また見本になっています。

(4) 設問:提供生地は10種類に限定しました。「同じ生地+不足分の追加」の現状に対してどのような生地をどのように追加するかもデザイン力の創造性発揮に寄与できたものと思いますが、ご意見等をお願いします。

《主な回答》

①今年度は生地の種類が限定されていたため、作品の創意工夫が比較できて、見ていてもわかりやすく感じられ、よかったと思います。

②生地を限定し、与えられた素材でデザインすることは学生たちが将来社会に出た際に企業内でぶつかるであろうあらゆる制約と共通する部分があり、全くの自由な発想のみでは企業内では生きていけないことを学ぶよい機会であると感じた。

③提供生地の不足分は学生が自由に生地を追加するため、逆にデザインの幅が広がり、学生にはよい経験になりました。授業でも取り入れてみたいと思います。

④デザインによってはメインに提供の生地を使いたくても不足のため、メインの布を変更したり、追加したりしました。できれば、提供の生地の用尺を自由にしていただきたいです。

(5) 設問:ファッションショー当日の運営について

《主な回答》

①ウォーキング、ポージング指導が良かった。

②準備、リハーサル、公開リハーサル、打ち合わせ、本番・・・と、とてもテンポよく1日で時間通りに行われてよかったと思います。

③ショーの演出も良く、1 点1点の作品がしっかり紹介されたところが良かった。

④運営担当の岐女短の学生がよく動いていて感心しました。

(6) 設問:参加した学生(生徒)の感想

《主な回答》

①ファッションショーまでの制作過程がよい学習の機会となった。
デザイン、制作面で短大、専門学校の方と交流があるとよい。

②他校の優秀な作品にふれ、交流をもてたことがたいへんよい経験になった。

③同じ生地を使用しても制作する人によって様々なデザイン、使い方がされて興味深かった。学校での授業とはまた違う刺激を受けることができた。

④リハーサル等で歩き方などの指導があってよかった。

⑤生地をいただいてのコンテストが他にないので興味を持って取り組めた。

5 事業全体の評価

事業全体を俯瞰して小生の実体験も踏まえて総合的に評価を行いたい。

(1)提供生地を生かしたデザイン力の向上

通常の制作ではまず、テーマに沿ってデザインイメージを構築し、このイメージに適った生地で制作している。しかし、今回は、全機関が同じ生地を使用して制作しているので、各機関、各制作者がどのように生地の特性を念頭においてデザインイメージを創造するか、そしてそのイメージを基づいた制作を行うかが人材育成の１つの要点であった。前述のように「観客の立場」として、「同じ生地が制作者によってどのようなファッション製品を制作してくるか、どこに新鮮さ、新しさを求めているかを発見することはとても楽しみであった」とのアンケート結果もあり、この回答は事前には全く想定していなかった成果の１つである。また、この方式(生地を決めて各生徒・学生がファッション製品を制作する方式)を早速、授業に取り入れたいとの回答もあった。

まとめると、生地を限定し、生地の特性を生かしたデザインは？　から、ファッション創造がはじまっているので、従来とは異なった創造力が育成、デザイン力の向上が十二分に図られたものと確信している。

(2)参加した生徒・学生の意見

生徒･学生の感想･意見を集約して以下の４分野にまとめる。

①他校の作品を見て：「自分と異なる感性に触れることができた。他校の作品と自分の作品を比較し、勉強になった。同じ生地でも全く異なる作品となったことがとてもすばらしかった、楽しかった。」

など学校内では体験不可能な、貴重な経験ができたと述べている。

②友達とのつながり：「いろいろ困難なことがあったが、仲間と相談し合い、助け合って進めることができ、つながりが一層厚くなった」と述べている。

③自分に対して：チャレンジしたことのない手法(生地に適ったデザインをすること)を学ぶことによってレベルアップを図ることが出来た。素材感の出し方が勉強になった。学校外でのコンテストに挑戦できた」など、がんばってよかった、大いなる達成感を味わうことができたとまとめる

④自分の未来に対して：今回の困難な課題の克服とその大きな達成感を基盤として「新しいことにチャレンジしたい、今回の経験をぜひとも生かしたい」とまとめる。

この事業に参加した生徒、学生諸君はもともと、「ファッションを勉強したい」という高い志、意欲、熱意をもって入学し、今日まで、デザイン力の向上に努めてきている。今回のように他機関から評価される、あるいは他機関の作品と自分の作品とを比較する機会を持つことができたことにより、なお一層、デザイン力のブラッシュアップに磨きがかかったものと思われる。

(3)ファッションデザイン教育研究会の実施

前年までは参加機関が全員集まるのは成果発表の当日のみであった。それまでの間に各機関が集まり、ファッションに対して何か研鑽したいとの希望があったので、本年度はファッションデザイン教育研究会を４回開催し、そのうち３回はファッションデザイン講座を開講した。授業あるいは各機関の事情などで３回とも全機関参加とはならなかったが、都合のつく機関が教員とともに学生の参加もあった。いずれも講師とたいへん近い距離で講義を受けることができた。しかもその内容が非常に実務的で、自分達が日頃困っていること、解決を求めていることであったので、質疑応答はたいへん活発であり、毎回予定時間を超過するほどであった。

４回のファッションデザイン教育研究会により、本事業が単なる新規デザインによる作品制作発表会だけで終わるのではなく、参加教育機関の横の連携を図るとともに、教育機関の代表者を取り巻く教員・学生・生徒にさまざまな情報を伝達して、将来のアパレル地場産業で活躍する人材の育成に寄与することをさらに一歩進めることができたものと推測される。

(4)参加校の教員

教員の方々にとっては、ファッション系の高校、専門学校、大学・短大が一堂に会することで、指導した生徒・学生が①他校のデザイン画、ファッションショーで作品を見ることが出来る、第３者に自分の作品を評価してもらう　②「私もあのような作品を作りたい」と、最適のお手本となったこと。③「創作意欲の向上、まさに自己啓発の源」となり、大きな刺激を受けたとまとめる。

(5)各機関の活用事例

各参加機関では本年１月から２月にかけて、卒業制作発表会が行われている。この事業での受賞作品を他の受賞作品といっしょに「受賞作品」の形式で再度、ステージ発表をしたり、あるいはロビーに展示するなどして、制作者の努力・栄誉を称えるとともに、他の生徒、学生への人材育成教材として活用されている。

(6)全体の評価

産業界では閉塞化した社内運営の活路を見出すために、同業種ではなく、全く異なった企業・業界との交流が盛んに行われており、この活動をいわゆる「異業種交流会」と呼ばれており、一般的に行われている事業である。異業種との交流により、『自社の「普通のこと」が他社では「新鮮」』、あるいは『全く別の視点で会話ができるので、アイデアの源泉である。他社では「普通のこと」が自社では「とても新鮮！」』に映り、早速、事業運営に活用して多大な成果を上げることができたとよく耳にしている。

本事業に参加している高校、専門学校、大学・短大はそれぞれ教育機関としては同じではあるが、指導対象の生徒・学生の

年齢も異なり、それぞれ特徴を有しており、今回の活動を通じて、他の参加機関の特徴、長所あるいは自分のところより優れている分野等を十分に把握できたものと思う。このことがきっかけ、縁となり、個別に参加校同士の交流がはじまり、活動分野が広がっていくことを期待したい。これらの機関がいっしょに活動してきたことは正に本事業が異業種交流の「教育機関版」であると強調したい。すなわち、異業種交流の学校版、「高・専・大の連携」のスタートである。

本事業は、いわゆる産官学のコラボレーション事業である。産学あるいは産官学事業の実態は特定の企業と特定の学校との組合せが一般的であり、ファッション、繊維分野の業界新聞ではそのあらましの記事が頻繁に掲載されている。しかし、本事業のように複数の企業の協力により、17 もの教育機関が研究を重ね、その成果発表として、一堂に会してファッションショーを行うという事業はおそらく唯一無二、ユニークであると考えている。この視点、取組みも評価の 1 つに加えたい。

最後に、最大のねらいである「人材育成」の評価を定量化することが出来れば最も望ましいところであるが、実際のところたいへん困難であり、以上に述べたように定性的評価ではあるが、高い教育的効果が認められ、本事業が「次世代層がアパレルデザイン力の向上をはかることができ、非常に意義深いものであった」とまとめの総合評価として評価したい。

人材育成とは『①「ものつくり」は「ひとつくり」②達成感！！』である。

本報告を閉じるにあたり、2006 年度～2008 年度の 3 ヶ年に亘り本事業の推進に多大なご支援をいただきました後援団体および協賛企業の皆様には、心からお礼申し上げます。ならびに積極的にご協力いただいた各教育機関関係者の皆様に対して紙上を借りて厚くお礼申し上げます。ありがとうございました。

本事業は財団法人中部産業活性化センターの受託研究事業であり、当研究事業の研究総括者が代表でまとめたものである。

本事業の概要を日本繊維製品消費科学会 2009 年次大会で報告した。（2009.6.13：京都女子大学）

【参考資料】

次世代層に対するアパレルデザイン技術啓発活動報告書（財団法人中部産業活性化センター、岐阜市立女子短期大学：平成 21 年 3 月）

（提出期日　平成 21 年 11 月 30 日）